「ヘルモンの山々に降りる露のように。」 詩篇 133 篇 1～3 節

ヘルモン山は、ガリラヤ湖の北方３２キロにあり、イエス様が３人の弟子を伴って「高い山に登られた」（マタイ１７・１）はここであると言われています。

ヘルモン山はイスラエルの北東にあって、３つの頂があり、標高２８１４ｍです。ガリラヤ湖の東のゴラン高原はイスラエル・レバノン・ヨルダン・シリアの国境が接しています。イスラエルを含むこの地域一帯は乾燥地帯ですが、ヘルモン山には雪が降り、山頂は一年中雪で覆われ、この水源を確保するために、領土争いが続いています。雪解け水がヨルダン川の水源ともなり、ガリラヤ湖を経て死海に注ぎます。

「ヘルモン」はヘブライ語で「聖なる捧げもの」という意味があり、確かにヘルモンの露は人々を潤し、神からの恵みを感じるものとなっています。「シオンの山々」はエルサレムのことであり、ヘルモン山から２００キロも離れているので、「ヘルモンからシオンの山々に降りる露」は、あり得ないのですが、イスラエルの人々は、全ての潤いの源はヘルモン山であると考えていたのでしょう。水はいのちの源であり、イスラエル全体に水を供給するヘルモン山を、神が「いのちの祝福」をしておられるしるしと感じているのです。

一節には「兄弟たちが一つになって、共に生きることは、なんという幸せ、なんという楽しさだろう。」とあります。この節は、イスラエルの人々に歌われる「Hine ma tov」という歌にあります。信仰に一途のイスラエルの人々が、どんなに迫害されても平和を求め、単に同胞が一緒に暮らすことを神に願い求めて、日々歌ったのです。

最近のコロナ禍、介護、認知症などの対処を経て、教会員が共に礼拝に集い、共に生き、助け合うことの素晴らしさを覚えました。今、ここに集う兄弟姉妹と共に、神の国にとこしえに住まう喜びは如何なるものかと感動し、また待ち望むものです。

さて、次に祝福の奥義が記されています。出エジプト記２９章に、大祭司の任職の儀式が記されています。「アロンとその子らを会見の天幕の入り口に近づかせ、水で彼らを洗う。装束を取り、長服と、エポデの下に着る青服と、エポデと胸当てをアロンに着せ、エポデのあや織りの帯を締める。彼の頭にかぶり物をかぶらせ、そのかぶり物の上に聖なる記章を付ける。注ぎの油を取って彼の頭に注ぎ、彼に油注ぎをする。それから彼の子らを連れて来て、彼らに長服を着せる。アロンとその子らに飾り帯を締め、ターバンを巻く。永遠の掟によって、祭司の職は彼らのものとなる。あなたはアロンとその子らを祭司職に任命せよ。」（4-9）。

大祭司の油注ぎは、被り物の上から注がれ、祭司の誇りである長いひげに滴り、「衣の端にまで流れ滴る。」のです。大祭司は、決してひげを切りません。大祭司は、命を懸けてその職務を全うしようとします。「神の子イエスという偉大な大祭司」（ヘブル４・14）こそ、救いと祝福の源なのです。この大祭司の存在こそ、汚れ罪深い人々が、神の選びの民として生きる根拠なのです。

多くのクリスチャンが、信仰を告白すれば、神の国に行けると安易に考えています。「教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされる為であり」（エペソ３・10）、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストの身体を建て上げるためです。私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」（エペソ４・12.13）。

教会において、罪深い人、未熟な人、愚かな人、弱い人、頑固な人、障害を持った人、病人、いろいろな人が助け合い、喜び合って生きる、そこに成長があり、神の祝福が注がれるのです。神を信じても罪深いことに変わりはありません。しかし、罪を悔い改め、救いを信じたのです。罪の認識は、隣の罪深い人と接し、愛さなければならないと考えた時に更に増します。悔い改めるということは、その人を愛し、助けるという行動で証拠立てられます。

個人的に信仰生活を営もうとすることは、罪人の特徴であり、自己中心であって、神がそんな人を神の国に迎え入れることはないのです。一人だけで信仰生活を送ろうとした人が、神の国において何をするのでしょうか。

世の中は、能力が尊ばれ、頭脳明晰で健康、身体も強いことが評価の基準になります。「しかし、神は知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」（Ⅰコリント１・27.28）。そういう人間こそ、悔い改めて、神を愛し人を愛する者となるのです。教会に集わず、奉仕もしない人は、この基準から外れます。この世の基準ではなく、神の基準に合わせて生きることが大事です。

教会理念

1．信仰に生きるキリストの弟子の養成

主の弟子は状況に左右されず聖霊に聞き従い、神を信じ人を信じて人々の救いと解放をもたらす。十字架に死んで神と共に生きるとは、自分と人々の罪からくる咎を覚悟し信仰と希望と愛とを持って福音の祝福の中に生きることである。キリストの弟子の養成こそ教会の使命である。

2．真理と祈りと讃美に満ちた信仰生活の指導

聖書の教え、真理は人を自由にする。祈りは問題や悩みを解決し、神の御心を確認する。讃美は癒しと喜びと力を与える。教会はそれらを教え指導し、互いの交わりの中で模範を造り出していく。

3．キリストを頭として愛によって結び合わされた共同体の形成

教会には多種多様な人々が神によってこの世から召し出されてくる。この信者を整え、神への奉仕という使命を果たすように導くには、キリストの弟子として十字架を負い主に従う指導者層が確立されなければならない。整えられ愛し合い一致した教会こそ神の栄光が現され成長する。

4．隣人に対する愛に基づいた執り成しと伝道の実践

神を愛する人は人をも愛し、行いを伴う信仰を持つ。真理を知らず罪と咎によって苦しんでいる人々を愛し、執り成し、福音を伝えることによってこそクリスチャンは成長し、祝福される。

5．地域と社会に貢献する魅力的な教会員の歩みと家族形成

教会と教会員の活動・事業・啓発運動を展開し、社会に影響を与えながら、同時に愛し合う家族を形成し、接する人々に福音を現していくことが、日本のリバイバルに必要であると私たちは信じる。

今週の聖書

【新改訳 2017】

詩 133

<都上りの歌。ダビデによる。>

133:1 見よ。なんという幸せなんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。

133:2 それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。

133:3 それはまたヘルモンからシオンの山々に降りる露のようだ。【主】がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

【NKJV】

Psa 133:1 Behold, how good and how pleasant it is For brethren to dwell together in unity!

133:2 It is like the precious oil upon the head, Running down on the beard, The beard of Aaron, Running down on the edge of his garments.

133:3 It is like the dew of Hermon, Descending upon the mountains of Zion; For there the Lord commanded the blessing-Life forevermore.